



## 青い旅路：日本の藍染についての調査とそれぞれの思い出

卞夢薇  
(北京師範大学文学院)



民俗学領域に足を踏み入れた時から今までの長い間、私はいつも民間工芸に深い興味を抱いていた。そんなに遠くない過去では、各分野の職人の作った物が私達の生活を支えていた。しかし、今ではそれらオーラに満ちた手作りのものは、工場で生産する同じ規格の製品に代替されていた。

それでも、現在の中国であれ、日本であれ、いくつかの手工芸が工業化社会の狭間で生き抜いている現象が見られる。この百年以上も続いた現代化の荒波の中で他国とよく似た苦境を乗り切った後、どうやって日本の職人たちは伝統の保存を続け、そのうえ時流に適応する中で技術と由緒を継承できたのか？私はその答えを見つけるために、藍染と、互に関連している事象を研究対象に決めた。

藍染工芸の先決条件は染料である。「藍草」というものは原料の総称であり、蓼藍、山藍、大青、琉球藍など染料制作に使用できる植物は、天候や土壌の品質によって、世界各地に散り散りに見られる。昔は上で挙げた種類が並行して使われていた時代もあったが、今の日本で一番常用されている天然藍染料の原料は蓼藍である。他の東アジア諸国と同様、過去の日本社会で藍染織物は庶民の日常服の材料として経済生活の中で重要な地位を占めていた。藍染織物の供給に応じ、染色を固めるために、業者たちは絶えず製藍法に改良を加えた。中世から今まで日本の藍染法の発展は終始停滞することなく、その過程の中で発酵法（薬法）が主要な藍染染料製法となつて、現代まで持続されている。

神奈川大学の留学生の姚さんの協力で、今回の調査で私は川崎市立日本民家園の伝統工芸館と群馬県桐生市織物参考館・紫（ゆかり）、そして青梅市の藍染工房「壺草苑」の三か所へ行った。藍染のプロセスを体験したほか、従業員たちにインタビューをして資料をたくさん収集した。初めて接する日本の染織文化に対する新鮮さと喜びは言うまでもなく、藍染工芸についての認識も調査の過程の中でだんだんと深まっていっていった。それに連れて、中国と日本の藍染工芸の相違の原因についても新しい考えが浮かんだ。また、天然藍染料の流通方法を知るため

に、浅草雷門近くの藍熊染料株式会社へ行くこともあった。そこで染料販売流儀の話をうかがって、現在の日本の藍草の自生状況もよく聞き取った。藍熊が研究開発した「大和藍」というものは革命的かつ極めて利便性を持った天然染料である。以上、四回の調査の間、私は神奈川大学図書館、歴史民俗資料学研究科の図書室、そして神奈川県立図書館の所蔵する藍染の資料を調べて、その詳細さに感服した。蓼藍と薬の主要産地である徳島県で、「藍師」と蓼藍の培植、薬の制作などの実地調査を行いたかったが、時間の都合で結局は行けなかった。一つの小さい心残りとも言える。

短い三週間だったが、今までの記憶の中では最も充実した日々の一つである。私の日本語の扱いはまだ上手くないが、指導教授小熊誠先生と研究室の学友達や、調査



写真1 藍を建てる時の泡立ち模様。「藍華」と呼ぶものである。



写真2 「壺草苑」という藍染工房の庭。

の途中で偶然出会った方々が私に最大の包容を与えてくれた。乾いた中国北方から来たこの私に横浜は、潮風とともに一番優しい思い出を残してくれた。私にとって今

回の訪問経験は一生の宝物となり、それは今後の研究人生において必ずや助けになるだろう。

## 日本の外国人陶芸家たち

Liliana Granja Pereira de Morais  
(サンパウロ大学大学院)



2013年に始めた実地調査の続きとして、今年はこのテーマに関する知識を深めることに重点を置いて取り組みました。そのために、陶芸に特化した美術館を訪れ、2人の工芸・陶芸専門家にお会いしました。私が訪れたのは五島美術館、畠山記念館、日本民藝館、出光美術館、三井記念美術館、東京国立近代美術館、根津美術館、箱根美術館です。お会いした専門家は、東京の西福ギャラリーのオーナー兼館長の青山和平さん、東京国立近代美術館の学芸員の木田卓也さんです。そのほかに、東京藝術大学、上智大学、東京国立近代美術館図書館にて去年よりも多くの書誌調査を行いました。

私が今年訪れた陶芸美術館のほとんどが、茶道と楽茶碗の展示会を行っていました。禅宗の影響を受けた安土桃山時代（1568～1600年）の茶の美学は、ほとんどの外国人が日本に対して持つイメージの構築に大きな役割を果たしました。千利休の指導を通じ、楽型もまたこの時代の禅の美学から生まれました。やがてアメリカ人陶芸家ポール・ソルドナーを通じて、アメリカでも用いられ普及されるようになりました。今ではアメリカン・楽として知られています。

私は昨年の研究を通じて、インタビューをした陶芸家のほとんどが日本の陶芸に対して以下のような共通のイメージを持っていることに気がきました。陶芸を芸術として受け入れていること、作品の機能性と使い道により重点が置かれること、手作りの作品により大きな価値が与えられること、地元の材料を使っていること、食べ物・季節・陶芸とのつながり、自然との近さ・自然が過程の1つとみなされること、質素で不完全なものが美しいとされること、修行の過程が厳しく長いこと、出来あがったものと同じくらい過程も重要視されること、です。

私は外国での日本人陶芸家に対するイメージは、民芸が大きく影響しているのではないかと思います。民

芸も禅宗の美学がきっかけで起こったものです。1926年、柳宗悦により日本の急激な産業化と都会化に対抗して民芸運動が起こりました。民芸運動では、名前の知られていない庶民の職人によって日常生活で使うために作られた、ごく一般的なものの美しさに価値を与えようとしました。この民芸の思想は、日本人陶芸家・濱田庄司がヨーロッパとアメリカで行った会議や実演を通して西洋に広められ、イギリス人陶芸家バーナード・リーチにより「リーチ派」として西洋的なものへと形を変えていきました。

また、1946年から1949年の間、濱田と師弟関係にあった益子出身の人間国宝・島岡達三も、西洋における日本の陶芸の普及に大きく貢献した人物です。師匠（濱田）と同じく、島岡も世界を回って講義や展示会を開き、益子にある自身の窯でも多くの外国人に指導しました。私が昨年インタビューをしたユアン・クレイグも島岡に教わった1人です。

昨年の調査で、日本で活動する外国人陶芸家の多くは男性であることに気がつきました。確認できた19人のうち、女性は4人だけでした。今年はさらに7人の（日本で活動する、あるいは活動していた）女性陶芸家を見つけることができたので、彼女たちへのインタビューを通して、日本人陶芸家の男性優位の世界において女性であることの難しさを探りました。そのうちの1人、北鎌倉在住の清水和子さんは、昔は女性是不純だとされていたため窯には入れなかったとおっしゃっていました。日系ブラジル人の陶芸家・後藤レジーナさんは伝統的な日本の陶芸界で働く女性が少ないことに関して、それが汚れ仕事で重労働だからだと述べていました。日本にいる外国人陶芸家の多くが男性である理由を日系アメリカ人のルリさんにお聞きしたところ、伝統的な日本の陶芸は身体的にとっても重労働であるため、日本以外の国でもほとんどの窯は男性が所有しているが、特に過去10年